国内研修報告書

研修人数：　２人

研修期間：　８月１日から８月２日

研修場所：　新潟県長岡市

研修テーマ：　長岡花火の意義と地域住民への影響

【研修動機】

私が長岡花火を研修のテーマに選んだきっかけは、高校生の頃に社会科の授業で学んだ歴史にある。長岡花火は、戦争で亡くなった人々の慰霊や、平和への祈りを込めて打ち上げられる特別な花火であることを知り、強い印象を受けた。その後も地域の人々が大切に守り続け、観光資源としても全国に知られる存在になっていることに関心を持った。今回の研修を通して、花火が単なる娯楽ではなく「歴史・文化・平和」を伝える大切な役割を担っていることを改めて学びたいと考え、このテーマを選んだ。

【研修内容】

・長岡花火の歴史についての講義に参加
・長岡花火館を見学
・長岡花火鑑賞
・地元の方へのインタビュー

【研修スケジュール】

1 日目　午前　長岡着
　　午後　長岡花火の歴史について講義・NPO 法人ネットワーク・フェニックスの代表理事（大原邦夫さん）へのインタビュー
２日目　午前　長岡花火館見学・長岡花火館館長（武士俣一樹さん）への取材
　　午後　長岡花火鑑賞
＊空いた時間に地元の方へのインタビュー

～長岡花火の歴史についての講義～

NPO 法人ネットワーク・フェニックスさんから、長岡花火の歴史について講義を受けた。長岡花火には、1945 年 8 月 1 日の長岡空襲で犠牲となった人々への慰霊と、平和への願いが込められていることを学んだ。空襲は 22 時 30 分から約 1 時間 40 分に及び、市街地の 8 割が焼失し 1488 名が亡くなった。当時 20 歳の七里アイさんの乳児を抱えて炎の中を逃げるも娘を失うという痛ましい出来事は、特に戦争の悲惨さを実感した。

長岡は空襲の翌日には駅が再開したことで物資調達が可能となり、全国でも早い復興を遂げた。そして 1 年後には復興祭り、2 年後には花火大会が復活し、犠牲者を悼む「白菊」が打ち上げられるようになった。今日の長岡花火は、単なる娯楽ではなく、平和を祈り継承していく行事であることがよくわかった。この講義を通じて、戦争の恐ろしさと平和の尊さを次世代に伝えていくことが私たちに課せられた使命であると考えた。

～NPO 法人ネットワーク・フェニックス代表理事（大原邦夫さん）への取材～

今回の取材では長岡花火の運営やフェニックス花火の意義について話を伺った。世界一

マナーの良い花火大会を目標とする長岡花火では観覧ルールを破る人が出ないようにチケットを三段階で確認していると述べていた。また、闇市での不正販売に対しては、チケットを記名式にするなどの対策を行っていると説明していた。

フェニックス花火は2005年の中越地震をきっかけに設立された「ネットワーク・フェニックス」によって支えられており、全国からの支援に恩返しをしたいという思いから立ち上がったNPOであると語っていた。運営においては、多くの募金に頼らざるを得ないことが大きな課題であり、街頭募金に加えクラウドファンディングを活用するなど、より多くの人々に協力を呼びかける工夫をしていると述べていた。

さらに、長岡花火は観光だけでなく、地域の絆やまちづくりに大きな影響を与えていると話していた。長岡は長岡空襲、中越地震など度重なる被害を受けながらも立ち上がってきた歴史を持ち、その精神は「長岡魂」と表現されていた。

今後については、フェニックス花火を継続的に打ち上げ、20周年を契機にこれまでの支援への感謝を示し、次世代に思いを伝えていくことを目指したいと語っていた。

～長岡花火館を見学して～

長岡花火館を訪れ、改めて長岡花火の歴史と魅力を学ぶことができた。展示では、長岡花火を代表する超大輪の花火や音楽と花火を融合させたミュージック花火についても説明があり、単なる花火の鑑賞を超え、物語性や演出を重視した文化的な側面を持つことを理解した。

花火が打ち上がる仕組みについても興味深い展示があった。通天閣ほどの高さに届く3号玉から、スカイツリーに匹敵する高さにまで上がる30号玉（正三尺玉）まで存在することを学び、その規模の大きさに驚かされた。また、花火玉の製造工程を紹介する展示では、薬品の配合から玉貼りに至るまで職人の緻密な作業が示されており、一発の花火に込められた花火師の情熱と技術の高さを感じ取ることができた。

花火大会という華やかな表舞台の裏には多くの努力が積み重ねられていることを知り、これからは花火を見るときにその背景や人々の思いを意識して鑑賞したいと感じた。長岡花火館での学びは、花火をより深く理解する貴重な機会となった。

～長岡花火館館長（武士俣一樹さん）への取材～

今回の取材では、長岡花火館の役割や魅力について話を伺った。まず、伝統文化の後継者不足について質問したところ、長岡花火では一般財団法人長岡花火財団が「長岡花火伝承会」を立ち上げ、文化や歴史の継承に取り組んでいると述べていた。展示を通じて来館者に最も伝えたい魅力については、最大全長2キロにも及ぶ打上げ幅であり、同時に打ち上がる尺玉の迫力は長岡花火ならではの絶景であると強調していた。

また、花火館設立のきっかけについては、これまで長岡花火を専門に紹介する施設が存在しなかったためであり、自身が館長となった経緯は、長岡花火が大好きで携わりたいと

いう思いから応募し、採用されたことによると話していた。
　取材を通じ、長岡花火館が長岡花火の魅力を未来へ伝える拠点として大きな役割を担っていることを実感した。

～長岡花火を鑑賞して～

　長岡花火を実際に鑑賞して、まず感じたのはその圧倒的な迫力である。夜空いっぱいに広がる大輪の光と胸に響く音は、想像を超える壮大さであり、視覚と聴覚の両面から強い衝撃を受けた。特にフェニックス花火は信濃川の川幅を埋め尽くすように広がり、空そのものが変化したかのような錯覚を覚えた。その壮大な光景に心を奪われ、ただ見上げるしかなかった。
　しかし、単なる美しさ以上に心に残ったのは、事前の研修で学んだ歴史的背景を踏まえて鑑賞したことである。長岡花火には戦争で亡くなった人々への慰霊や、震災からの復興への願いが込められていると学んでいたため、一発一発の輝きに深い意味を感じ取ることができた。白菊が夜空に開いたときには、犠牲者への鎮魂の祈りが静かに広がっていくように思え、胸が締めつけられる感覚を覚えた。
　単なる花火大会を超え、長岡の歴史と人々の想いに触れることのできた、忘れられない体験となった。。

～長岡市民へのインタビュー～

　研修の合間には、長岡市民へのインタビューを多数行った。ここではその一部を取り上げる。
　70 代の元教師の女性は、教育現場で空襲や花火の意味を伝えてきた経験から、長岡花火を「平和を願う教育資源」として捉えていた。犠牲者を悼む花火の白菊を見ると、涙が出ると語っており、花火大会が単なる観光行事ではなく「祈りの場」として残ってほしいという願いが示されているように感じた。
　また、20 代の屋台スタッフの男性は、三代続く屋台を営みながら花火大会に関わってきた経験から、花火とともに地元文化を世界に発信する役割を担っていることを誇りにしていた。彼にとっては花火と屋台が一体となった「地域のアイデンティティ」であり、今後は長岡の文化を世界へ発信する場として発展してほしいという展望を抱いているように感じた。
　一方で味噌カツ屋の 30 代の女性店員は、長岡花火に込められた想いを自身は理解していたが、その想いを知る人は少なくなっている現状に危機感を抱いていた。長岡花火の裏にある背景を語り継ぐ場を増やす取り組みがさらに必要になっていくと感じた。
　以上を踏まえると、長岡花火は「平和教育の資源」「地域文化の発信拠点」「慰霊と復興の歴史的記憶」という複数の側面をもちながら、市民の世代ごとに異なる形で受け止められていると考えられる。今後の花火大会の継続にあたっては、これら多様な視点を尊重し

つつ、祈りと平和のメッセージを次世代へ伝える仕組みづくりが重要であると考えた。

～参考文献～

長岡まつりの起源と長岡花火に込められた想い｜長岡花火財団ニュース｜長岡花火 公式ウェブサイト（長岡花火財団）